

入選

作文部門

小学校低学年の部

自然を守る下水道

富士市立吉原小学校 三年 伊達 朝陽

富士市では、今泉や原田、比奈などの地いきでわき水が出ていて、のみ水として富士のめぐみをかんじることができる。水を大事にするということでは、下水道も同じだ。

今までぼくは、家庭からのはい水は、きれいにされて川に流すくらいにしか思っていなかった。でも、今回下水道について話を聞くと、人々が安心してくらせる工夫やかんきょうへの気づきがあることがわかった。

家庭はい水は、下水道を流れて下水しよ理しせつにたどり着くと、まずゴミやよごれを取りのぞく。び生物をふくんだどろの中に空気が送りこまれて、び生物は元気になる汚れをたくさん食べてくれる。ここできれいになった水ときたないどろにわかれて、水は消どくして川に流される。

水がきれいになるまでにはたくさんのお工ていがあるが、中でもび生物の力は大きいと思う。よごれを食べるほかに、土じょうだつしゅうといって、においのしないガスとして大気に発さんされている。じょう化センターには、じょうやべんも流されているのに、においがしないのはび生物のおかげであり、小さいまほう使用のようだ。

街をきれいにする、自ぜんを守るほかに、ぼくが一番きょう味をもったのは、エネルギーを作るといふことだ。どろやバイオガスはひ料やセメントのざい料になり、消化ガスによる発電もしている。じょう下センターの屋根には、太陽光パネルがせつちさられていて、さいがいがおきた時には、地いきに電力をきょうきゅうすることもできる。地球温だん化ぼう止を色々な方向からとり組んでいふことがわかり、あらためてくらしをささえてくれていることに感じやしたくなった。

このすばらしい下水道やじょう化センターが長く活やくできるように、ぼくができることは何か考えてみた。小さなことだけれど、トイレにトイレットペーパー以外の物を流さない台所ではあぶらや野菜くずなどを流さない。風ろ場では、かみの毛を流さないようネットを取り、ごみばこにすてるといふことだ。一人ひとりがかく実に行うことで、これからも安心して下水道を使えるのだと思う。

きれいになった水は自ぜんをじゅんかんして、全国にほこれる富士のおいしいのみ水になる。下水道も富士の水も、ぼくたちのくらしにかかせない大切なものなのだ。